

道德の対話

——メッセージの二層性をめぐって——

村 島 義 彦

(一)

「この前は、いわゆる『道德』について、わけても宗教と対比しながら、それが何に立脚し、何を核とし、何をゴールに仰いでいるか等々を、いささか総論的に論じてみたけれども、このテーマの内包はしかし、そうした論では十分にカバーできようはずもなく、本当の意味で存分に浮き彫り化しようとすれば、さらに、さまざまの角度から、さまざまな補足がしかるべく加えられなくてはならない」

「それに異存はないとして、ならば、どうした角度から、どうした補足が加えられたらよいのでしょうか」

「いろいろと考えられるけれども、そうだな、むしろ各論的な方向に、たとえば、「感謝」「反省」「謙虚」といった三徳の關係とか、これとも基本的に関連した道德メッセージの二層性などにあえて的を絞るのも、そうした具体策にはちがいない」

「『三徳の關係性』に『メッセージの二層性』ですか・・・」

「いささか耳慣れないかもしれないが、それほど複雑な中身を訴えているわけでもなく、思うに、「三徳の關係」でなく「三徳の推奨」についてなら、前回も、それなりに触れられていたのではなかったか」

「なるほど、わたしの記憶するところでは、われわれ人間が「關係的存在」と捉えられた上で、そうした關係のできる限りの良好化に資するさ

まざまの徳目が、世の道德では、さまざまに掲げられている・・・という具合に、あそこでは展開されていましたからね」

「たとえば、この世に人間が一人しかいないとすれば、孤島のロビンソン・クルーソーさながら、『やりたい時に・やりたい処で・やりたい事を・やりたい分量だけ』したとしても、誰にも迷惑はかからないから、あえて咎められる必要もないだろうが、周囲にはしかし、他の人間が数多くいて、われわれの個人的行為は、何らかの程度、こうした人びとに影響を及ぼさないと済まないはずだ」

「それゆえ、小石を投じた波紋が当人以外に及ぶのなら、小石を投じるに先だって、波紋の及ぶ範囲内の人たちから一応の了解を取っておかなくてはならない、というわけですね」

「いやしくも集団で生きる以上、それは、最低限度の基本ルールであつて、そうしたルールの基本性は、たとえば、「人からされて嫌だと思うことは、人にするのを慎むべきである」という、孔子が口にしたネガティブな戒めとしても、あるいは、「人からされて嬉しいと思うことは、人に向けてどんどんすべきである」という、イエスが口にしたポジティブな戒めとしても、十二分に確認されるにちがいない」

「さらにその続きを付度すると、こうなるでしょうか——その種のルールは、人間關係の良好化に大きく焦点づけられていて、この延長上には、あるいは隣人愛、仁や恕、誠ないし思無邪など、さまざまの道德

的徳目がそれぞれに名を連ねて、広く人口に膾炙した「感謝」「反省」「謙虚」の三徳も、やはり、こうしたグループに属する有力なメンバーにはちがいない、と」

「まことに結構。当を得た要点のキャッチボールがここまで見事に噛み合うと、わたしとしても、まるで文句のつけようがない。そこで、この嬉しさにかまけて、さらに、こう問うとしようか——ではなぜ、感謝・反省・謙虚の三徳が、人間関係の良好化に資するわけでも有力なメンバーとして、これほど広く登録されているのだろうか、とね」

「あまりにも、問わずもがなの問い」であるため、逆に、しかるべき返答に窮するというのが偽らざるところです」

「その気持ちは十分に汲めるのだが、本題に掲げた「三徳の関係性」にいたる不可欠の布石でもあり、愚直を承知であえて答えてもらいたい」

「そうはいつでも、あまたの説明の中でも、あまりに当然すぎる事柄をなぜ当然か」と説明する以上に厄介なものはありません」

「分からなくもないが、たとえば、こう切り込んだらどうだろうか。ここにいう感謝・反省・謙虚の三者が、徳目として積極的に推奨されるのであれば、その対極に位置する三者は、逆に、好ましくない悪徳として忌避されるべきだけれども、そうした三者として、そもそも何が特定されるのだろうか、とね」

「そのような対極への問いが、なぜ、推奨のポジティブな説明に繋がるのでしょうか」

(二)

「しばらくは耳を傾けてもらうとして、ごく一般的には、「ありがたいな」と深く感謝する態度の対極には、「まことにけしからん、どうなっ

いるのだ」と膨れっ面で漏らす、不平（ないし不満）が、そして、腰の低い謙虚の姿勢の対極には、ひたすら鼻の高い、傲慢（ないし慢心）が、それぞれに位置づくのは改めて断わるまでもない」

「ええ」

「しかるに、反省の対極については、それほど容易に事が運びそうもない。というのも、反省それ自体をどう捉えるべきかについて、いささか、意見のバラツキがあると思われるからなのだが、どうかね、この点について、ひとつ忌憚のないところを答えてもらいたい」

「手間取るまでもありません、世の反省は一般に、「深く反省して」心の底から悔い改めて」、あるいは「反省が足りない」自らの非を認める素直な態度に欠ける」などの用例も示すように、おしなべて後悔（ないし懺悔）に近い意味で用いられているのですから」

「なるほど、それを踏襲するなら、反省の対極には、そうした悔悟を著しく欠いた、思い上がり（ないし独りよがり）が位置づくだろうが、これはしかし、果たして妥当といえるのかどうか・・・」

「といたしますと」

「試みに今、ここでの「反省」を英語に置き換えると、いわゆる「reflection」が導き出されてくるけれども、この「リフレクション」は、世にいう後悔や懺悔に等置されるわけではなく、まず第一に「反射」を、次いで「反映」を、そして第三に「内省」を意味していた。反射にせよ、反映にせよ、その本質は、物事のありのままの映し出しにあって、それゆえ、この線上に置かれた内省もまた、深く事態を省みてそのあるがままを捉えること、にそもそもその内実を求めなくてはならない。つまりところ反省は、あるがままの自分を虚心に眺めること、に等置されてよいのである」

「それは初耳でした。けれども、そうだとするなら、後悔や懺悔に等置

される世の反省理解は、一体全体、どこから導き出されてきたのでしょうか」

「さほど難しくもあるまい。この場合の醒めた自己凝視を介して、普段は気にも止めずに看過していた自分の実態がまざまざと目に映り、その結果、浮かび上がった欠点の数々が改めて自覚された際には、素直な後悔（や懺悔）がおのずと湧き出てくるだろうからだ。もつとも、この逆に、浮かび上がった長所の数々が改めて自覚された際には、心からの誇り（や自負の念）がおのずと湧き出てくるかもしれないが」

「ネガティブな後悔に加えて、ポジティブな自負もまた、というわけです」

「およそこのように、後悔にしても自負にしても、方向を異にした反省本体のしかるべき結果にほかならない。だとすると、醒めた自己凝視を本分とした反省の対極には、果たして何が位置づくのだろうか・・・」

「それは、のぼせ上がった自己への暗言を本分とする以上、おそらく、世にいう頑迷固陋にちがいありません」

「そのように、世にいう感謝・反省・謙虚の姿勢の対極には、世にいう不平・頑固・傲慢の姿勢が位置づくとして、われわれがもし、後者のグループを一週間ばかり、ひたすら互いに心掛けるならば、どうだろうか。わずかの感謝、わずかの反省、わずかの謙虚も頑なに拒む方からは、普段以上にギクシャクした、数々の摩擦に溢れた耐え難い人間関係が間違いなく導き出されてくるにちがいない。この点は、あえて我が身で実験しなくとも、世の体験的事実として誰にも十分に了解されているのではないかね」

「申すまでもありません」

「ならば逆に、われわれ自身が、前者のグループ（＝感謝・反省・謙虚）を一週間ばかり、ひたすら互いに心掛けるなら、そこからは、普段以上

にスムーズな、まことに居心地のよい、豊かな寛ぎに満ちた好ましい人間関係が導き出されてくるのも、やはり、世の体験的事実として十分に了解されるにちがいない」

「当然そうなります」

「なればこそ、この世にあるかぎり、どんなに足掻いても数々の人間関係から足抜きできないわれわれにとつて、そうした関係の中身を、ギクシャクからスムーズに向けて少しでも移行させるべく、不平・頑固・傲慢にかわつて感謝・反省・謙虚の三者が、ひたすらに訴えられたのであった——こうした説明で、一応は満足いただけるだろうか」

「お見事です」

(三)

「ところで、感謝・反省・謙虚の三つは、個々別々によりは、三点セットの形でこれまで一括して掲げられてきたけれども、この点について、もしも誰かがこう問い掛けたらどうだろうか。すなわち、「わたしは、反省と謙虚はともかく、感謝のみは性に合わないのです、これを抜いて、前の二つに焦点を絞つてはいけませんか」とね」

「そうした問いも、さまざまな人のさまざま好みを考えると、まったく無いというわけにもいかないでしょう」

「そんなにも気安く「無いというわけにもいかない」などと口走らないでもらいたい。この問いが何を含意しているかに本気で思いを巡らすなら、とうてい「ありそうにも思われる」などと簡単に相槌は打てないだろうからね」

「そのまま拘られるのは、しかし・・・」

「というのも、ここでの問いには、感謝・反省・謙虚の三徳が、それぞ

れに中身を違えた、別種の、互いに独立した個々の徳目であるのか、それとも、異なっているのは単に名称のみで、実体においては等しく、まさに三位一体の形をなしているのか、をめぐると一つの解答がひそかに含まれていたからにはかならない。すなわち、三徳の相互関係が、そこでは、暗々裡に前者（＝個々バラバラ）の姿で想定されていたといえるだろう」

「なるほど、わが身の迂闊をしつかりと恥じなくてはなりません」

「この場合、ここでの配置をいじって、「感謝と謙虚はともかく、反省のみは」としても、あるいは「感謝と反省はともかく、謙虚のみは」としても、問いの本質は一向に変わらないのである」

「ええ」

「それでは、さらに歩を進めて、感謝・反省・謙虚の三徳は、本当のところ、どのように関係するのだろうか。まったくの個々別々と考えるべきなのか、それとも、いわゆる三位一体と捉えるべきなのか——この点を特定しようとするれば、三徳から任意のいずれかを選んで、その中身を追究していった時、これが果たして、他の二つにおのずと繋がっていくのか否か、をしつかりと見定めなくてはならない」

「妥当な手順といえるでしょう」

「ところで、あえて結論を先取りするべく、みずからの勘に無心に問いかけるなら、果たして、前者と後者のいずれに軍配が上がるだろうか。ひそかに思ったところを、そつと耳打ちしてもらいたい」

「あくまでもわが勘を信じるなら、そうですね、やはり前者よりは後者となるでしょうか」

「さすがに、いい勘^〆をしているな。ならば次に、それを裏書きするべく、ためしに反省を選んで、この点を具体的に確かめてみよう」

「願ってもありません」

「ここにいう反省は、先にも指摘したように、あるがままの自分を虚心に眺めるといって、醒めた自己凝視をそもその本質としていたが、そのような自己凝視が徳として強調されたのは、ほかでもない、普段の日常生活では、これに代わった自己への暗盲が執拗に座を占めていたからであった」

「・・・」

「たとえば、普通の人生を三〇年ばかり経てきた者なら、人からいまだしてもらっていない事と、すでにもらった事の全体的な比率が、ほぼ半々に達しているのではないだろうか。著しく恵まれた者なら、比率の針は心もち後者に傾き、著しく不遇な者なら、その針は心もち前者に傾くだろうが、ほとんどの場合、針の傾きの平衡は否定できないはずだ」

「ええ」

「にもかかわらず、人間が具える生来の身勝手に支えられて、いまだにしてもらっていない事は、常時、驚くほど克明に記憶されているのに対して、すでにもらった事は、それほど克明に記憶されているわけではない。だから、普通の日常を普通に生きるかぎり、われわれの頭には、してもらっていない事の数々が思い浮かんで、さまざまの不平・不満・不服が次々と口をつくけれども、これはしかし、大人気ない我がままと咎めるよりは、むしろ、しごくまっとうな事態と素直に了解されてしかるべきかもしれない」

「それはそうでしょう。」「あれもまだだ、これもまだだ、それもまだだ・・・」とひしひし実感されながら、それでいてなお、正当（？）ともいふべき不平を押さえつつ、逆の感謝をあえて口にすべきいわれなど、およそないのですから」

「まさしくその通りで、「してもらっていない」という事実^〆に立脚した不平は、どう考えても、心理的にまっとうと評価するほかはない。とは

いえ、ここにおける不平が立脚するそもその事実——してもらっていない——は、果たして、本当にまっとうと言えるのだろうか」

「……」

(四)

「たとえば、就寝前の一刻、静かに黙座して虚心に一日の出来事をふり返るなら、慌ただしい真昼の流れの中で——見栄と衒いにまといつかれた昼の目には——見えなかった光景が、改めて浮かび上がってくるのではないだろうか。人間の宿業ともいうべき身勝手から、つねに意識の前面に顔を覗かせる、いまだしてもらっていない事々の数々に加えて、これほど常に意識化されているわけではない今一つの、すでにしてもらった事々の数々が思い出されて、ほとんど前者一色に染め上げられた昼の光景が、両者の混交を介して、全体的には後者に向けてその色調を変えないわけにはいかないからだ」

「なるほど、ひたすら正当に意識化されていた前者の列に、新たに意識化されて正当な地位を取り戻した後者が迎え入れられて、元々からの双方のバランスが正当に自覚された結果、前者に由来する不平という黒色に、後者に由来する感謝という白色が混入され、その全体が、黒から灰色に——つまりは白に向けた黒の希薄化に——移行したというわけですね」

「本当の意味での反省は、このように、黒に彩られがちな世界に白を混入させ、そもその全体を灰色に導くのが通例であって、当の反省を介して、黒に彩られがちな世界が、いっそう黒の度合いを深めたり、あるいは、白に染められていた世界が、黒の混入によって、つまりは灰色に移行した例など、そもそも耳にされた試しがあるだろうか。われわれ人

間に刻み込まれた生来の身勝手の根深さを考えると、こうしたケースは、それこそ皆無に近いと考えないわけにはいかない。つまりところ反省は、基本的に、不平から感謝への方向を辿らせるのである」

「もつともです」

「ならば、人間における今一つの身勝手も取り上げてみよう」

「えっ」

「先ほどは、すでに、してもらった事といまだ、してもらっていない事とを相互に対比させながら、前者に対するおのずの等閑視をしつかりと指摘したけれども、ここにいう、してもらった事は、この外にも、いわゆる、してやった事に広く対置されるのではないだろうか」

「それはそうです」

「しかも先と同じく、われわれは総じて、人にしてやった事々の数々は驚くほど詳細に覚えているのに、他方、人からしてもらった事々の数々は、それほど鮮明に覚えているわけではない」

「いわゆる「貸し」の項目と「借り」の項目では、記憶に留まる鮮度がまるで異なっていますからね」

「さらさら悪気はないのだが、金銭にせよ物品にせよ恩義にせよ、おしなべて借りた事柄の数々は、貸した事柄の数々に比べて、記憶に留まる鮮度が極端に薄いのは否定できない。「何と打算的な……」と嫌気が走るかもしれないが、元々、人間はそういうように出来ているのかも知れない」

「否定するわけにはいかないようです」

「そうであるなら、日常の意識に上るのは「借り」でなく「貸し」の数々である以上、この貸しに支えられて、貸し手である自分が誇らしく思われないわけではない。当の誇らしさを露骨に顔に出そうと、そつと胸にしまい込もうと、世話される側でなく世話する側に身を置いた自分におのずと、鼻が高くなるのは否めないからね」

「ええ」

「これはしかし、貸しの数々が隠れもない事実である以上、しごくまっとうな人情と考えるほかはない。要するに、常日頃の生活では、人間の身勝手に支えられて、世話される側に立った。腰の低さよりは、世話する側に立った。鼻の高さが——それゆえ謙虚よりは傲慢が——ひたすらに幅を利かせ勝ちなのである」

「仰せの通りです」

(五)

「けれども、就寝前の一刻、静かに端座して虚心に一日の出来事をふり返るなら、常に意識に上っていた。してやった事の数々に加えて、これほど鮮明に意識されていなかった今一つの。してもらった事の数々が、改めて浮かび上がってくるにちがいない。まっとうな人生を歩んでいるかぎり、人様のお世話をした「貸し」に劣らず、人様からお世話いただいた「借り」の方も、半々に近い形で見られないなら、むしろ自然と評されてしかるべきだからだ」

「まったくです」

「お世話を受けた借りについては、おのずと腰も低くなり、いうところの謙虚がわが身に醸し出されてくる。これが自然の人情だとすると、先に同じく、ここでも反省を介して、生活の中での具体的な「貸し」に立脚した、その意味ではまことに正当な。鼻の高さ。ないし傲慢に、生活の中での具体的な「借り」に立脚した、やはり正当な。腰の低さ。ないし謙虚が混入して、とどのつまりは、傲慢という黒に謙虚という白が交じって、そもその全体がかなり灰色がかかることになる」

「そのような灰色は、つまりは黒の薄まりであり、それだけ白に向けた

近づきを意味するわけですね」

「およそこのように、反省という行為は、人間に宿った根深い身勝手を念頭に置くなら、日頃の傲慢を強めたり、数少ない謙虚を減らすよりは、基本的に、傲慢から謙虚への方向を辿らせると考えないわけにはいかない」

「賛成の一票を投じましょう」

「あくまでも反省は、本気でなされるかぎり、他方における感謝と謙虚を導かないでは措かないのだが、その逆に、こうも言えないだろうか。「もし仮に、感謝の日々を送っている者がいるなら、当人は、おのずからの反省を介して、すでにしてもらった事の数々を意識化し、これらを、いまだしてもらっていない事の数々に交ぜ入れているからこそ、双方がほぼ半々という基本事実によって、不平に片寄らない感謝の生活を営んでいられるのだ」とね」

「なるほど、反省を介して把握された前者の割合が、後者に比べて著しく低いといった異常事態の中で、それでもあえて感謝を表明するなど、まっとうな不可能に近いのですから・・・」

「それは同じく、謙虚にも当てはまるにちがいない。すなわち、もし仮に、謙虚を絵に描いたような者がいるなら、当人は、おのずからの反省を介して、お世話いただいた「借り」の数々を意識化し、これらを、お世話した「貸し」の数々に交ぜ入れているからこそ、双方がほぼ半々という基本事実によって、傲慢に片寄らない謙虚の生活を営んでいられるのだ、とね」

「われわれの人情から考えて、どう計算しても世話を受けた借りの数よりも、世話をした貸しの数が極端に多いとすれば、それでもあえて腰の低い謙虚な人間など、かえって薄気味も悪いでしょうから」

(六)

「さて、これまでの考察から、感謝・反省・謙虚の三徳は、あくまでも三位一体の関係にあつて、そもその実体を同じくしながら単に名称を違えるのみ、という点が基本的には確認されたと思われる。と同時に、人間には度し難い身勝手が具わつていて、すでにしてもらつた事としまだしてもらつていない事をめぐつて、さらには、お世話いただいた事とお世話した事をめぐつて、後者の記憶は常に驚くほど鮮明なのに、前者の記憶は、どういうわけが、これほど鮮明とはいいがたい点も改めて確認されることになった。この点はしかし、さしたる悪気があるわけではなく、人間なるがゆえの基本習性と考えた方がよかつたのだけれども：」

「ええ」

「そのような人間理解に立つと、驚くほど根深い人間の身勝手そのものは、人間に関わる教説——わけでも道徳——の展開において、不可避の前提条件に組み込まれないわけにはいかないだろう。人間存在の赤裸々な現状に足場を置かないで、人間に関わる教説など、とうてい生産的に論じがたいからだ」

「もつともです」

「そこで今、ここに焦点づけて、世の道徳が共有するであろう一般的特徴を、次のように仮定してみよう——道徳では、あるがままの事実を捉える主体の側での無意識の片寄りが、避け難い人間的現実として一応は認定された上で、その是正に向けて、あえて逆方向の片寄りが積極的に訴えられているけれども、これ自体は単なる方便であつて、本当のところは、あるがままの事実があるがままに（≡どちらにも片寄らないで）捉える。まっとうさが、が訴えられているにすぎない、とね」

「いささか抽象的ではありますが、言わんとされているのは、もう一つ

の課題に掲げられた「道徳メッセージの二層性」なのでしょいか」

「まさしくその通りなのだが、言い回しの、抽象性^々を指摘された手前もある、ささやかながら、ここに仮定された中身を、道徳の世界で広く推奨される「自足の姿勢」を用いてなるだけ視覚化してみよう」

「お願いします」

「知つての通り、妙心寺の数ある塔頭の一つに属する竜安寺は、虎の子渡しの石庭で全国に知られているけれども、われわれがもし、岩と砂と土塀が奏でる枯山水の妙を堪能したのち、さらに足を裏庭にも延ばすと、そこに、水戸光圀が寄贈したと伝えられる白状の石が、樹々と苔の中にそつと据えられているのを目にするにちがいない」

「よくよく眺めると、石の中央には四角い穴が穿たれて、四囲には、北側に「五」、東側に「佳」、南側に「止」、西側に「矢」と読める文字らしきものが刻まれている、例の有名な、判じ物^々ですね」

「禅宗特有の機知を盛り込んだこの判じ物は、ところで、何を告げているのだろうか」

「それを読み解くには、東西南北の文字らしきものに、中央の四角い穴を加え、四つの漢字を作り上げなくてはなりません。すなわち、「五」と「口」を合体させて「吾」、「佳」と「口」を合体させて「唯」、「止」と「口」を合体させて「足」、「矢」と「口」を合体させて「知」という風に漢字を作成するなら、その全体は、時計回りに「吾唯足知（吾レ唯タ足ルヲ知ル）」と読み解けるのではないでしょいか」

「簡素を絵に描いた裏庭の一角でこれを目にすると、無駄を排した禅寺の静寂に支えられてか、「足るを知る」というセリフが、驚くほど素直に心の奥まで染み込んでくるのは否めない。そして、ひそかに思うのである。これは実に、竜安寺そのものが、ひたすら急ぎのリズムを刻み続けるわれわれの日常に対して、その「飽くを知らない」姿勢に反省を促す

べく、あえて逆の「足るを知る」それを暗々裡に訴えているのだな、と」
「ええ」

(七)

「ここに訴えられている——われわれの耳には多少とも痛い——自足の姿勢は、ところで、これのみで積極的な意味をもつというよりは、対極に位置する今一つの姿勢とセットになって、はじめて本来の力を発揮できるのではないだろうか」

「・・・」

「試みに今、「足るを知る」姿勢を、そこでの抑制機能に着目してブレーキ一般に、「飽くを知らない」姿勢を、そこでの駆動機能に着目してエンジン一般になぞらえるなら、マイカーを例に取るまでもなく、およそブレーキを欠いた車で、果たしてどれだけのアクセルを踏み込めるだろうか」

「危険に際して急ブレーキを踏めないのであれば、いつ出会うか判然としない危険にそなえて、いつでも停止可能なスピードしか出せないのとは言うまでもありません」

「要するにその場合、エンジンの性能をフルに活かして存分にスピードを楽しむなど、望むべくもないだろう。その逆に、高性能のエンジンを搭載せず、いつでも停止可能なスピードしか出せないのであれば、あえてブレーキも必要とされない。そうした点は、幼児の三輪車、少年の自転車、青年の大型バイクを思い浮かべるだけで、りっぱに裏書きできるにちがいない」

「エンジン（駆動機能）は、ブレーキ（抑制機能）を伴ってはじめて持てる力を存分に発揮できるし、ブレーキも、高性能のエンジンを欠くなら

無用の置物に留まるほかはない、というわけですね」

「およそこのように、「足るを知る」姿勢と「飽くを知らない」それは、車におけるブレーキとエンジンの関係さながら、いずれを欠いても、等しく他方は十全に機能しない共存の関係を保っている。この関係は、教育勅語にいう「古今を通して過らない」基本の真実であるのだが、われわれの日常を眺めるかぎり、後者の一方的な優勢に揺らぐ気配はほとんど感じられない」

「仰せの通りです」

「そうした優勢の原因を辿ると、苛酷な自然界での数多の生存競争を逞しく生き抜いた過程で、個々人の核の部分におのずと刻み込まれた「more and more（より以上に・さらに以上に）」の習性に、あるいは行き着くのかもしれないが、この習性はしかし、科学技術の爆発的な躍進を背景とした高度産業社会に身を置くわれわれの日常を介して、ひたむきな強化の道を歩みつつある」

「今日の「妥協なき効率化の推進」などは、さしずめ、高度産業社会を代表する典型的指標にちがいません」

「もつとも、高度産業社会が追い求めたのは、われわれの生活手段の全般に及ぶ効率化であって、生それ自体の効率化ではなかったのだが、効率化された生活手段の数々に囲まれ、その恵沢を十二分に享受する中で、効率化の発想が、生活手段のレベルを超えて、生それ自体にまで及ぶのにさほど時間はかからなかった」

「ええ」

「たとえば今日、各分野における生活手段の効率化を介して捻出された時間的余裕（ないし余暇）は、元々、生活の充実に資すべく捻出されたはずなのに、用いられる際には、あろうことか効率のリズムに従っている。われわれの「余暇（leisure）」を振り返っても明らかのように、それは、

元々は「仕事 (labour)」の対極に位置し、それゆえ、レイバーの世界の基調である「効率」とは別個のリズムを刻むべきものであった」

「レジャーの生命は、あまねく効率の縛りを解かれた点に、すなわち、そもそもの効率を超えた点に求められた、というわけですね」

「にもかかわらず今日のレジャーは、「きたるべき五月の連休を、できるだけ娯楽を満載して、どれだけ効率よく過ごせるか、そのスケジュールを綿密に練らなくてはならない」といった巷の声にも代表されるように、明らかに、レイバーのリズムを基調に仰いでいささかも憚らない。そもそもの基調をレイバーに仰ぐ以上、そうしたレジャーは、実体的にレイバーの延長上にあると考えないわけにはいかないのに」

「いささか気取って表現するなら、効率のリズムの無意識の刻み込みを介した世のレジャーのレイバー化」といったところでしょうか」

(八)

「およそこのように、レジャーの効率化がレジャーの効率化にまで飛び火し、おしなべて手段の効率化が目的の効率化にまで及んだ今日の奇妙な状況は、古人の目にはおそらく、「ミイラ盗りがミイラに成り果てた」皮肉な典型例と映ったにちがいない」

「ミイラ盗りのミイラ化……とは言い得て妙な気がします」

「そうした古人の目を恥じる暇もなく、われわれは、時間の点では「より早く」を、分量の点では「より多く」を、値段の点では「より安く」を、ひたむきに追求して止まない。まさに「more and more」と形容されるほかにないこのスタイルは、しかし、否定すべき負の推力というよりは、事の全体に着目して、むしろ、まっとうな正の推力として積極的に評価されなくてはならないだろう」

「……」

「この過剰が招き寄せる弊害の数々に目を奪われて、当のスタイルまで否定するのは、まさしく行き過ぎ以外の何ものでもないからだ」

「なるほど、抑え切れない「more and more」に促されて、これまで、

いかに多くの成果が——物心の両面に互って——築き上げられてきたかを簡単に振り返っただけでも、その点は、十分に了解されますものね」

「内なる「more and more」は、それゆえ、われわれ人間には必須の力でもある。とはいえそれは、誰もが、溢れる程に装備し溢れる程に發揮しているから、その必要性はこれまで、どこからも声高に訴えられなかった」

「ええ」

「しかるに、これとは逆の自足の姿勢は、今の時代にそぐわないのか、ほとんどの人の関心の外にあって顧みられないから、逆に、さまざまの形で、積極的に注意が喚起されたのであった。こうした事情は、T・カーライルの「反・自覚論」(と高坂正顕が命名したところのもの)を彷彿させるにちがいない」

「「反・自覚論」……ですか」

「そう首を傾げるには及ばない。この論は、「われわれが胃腸の存在を意識するのは、それらが、何らかの異常を訴えた時であって、もっぱら健全な状態であれば、ほとんど意識されないのである」という風に、ざっと具体化されるだろうからね」

「なるほど、積極的な訴えの対象は、それ自体の目下の不十分を物語っていて、逆に、訴えの対象から除外されているなら、目下の十分性を無言で物語っている、というわけですか。ここでのメッセージを、心憎いほど見事に代弁していますね」

「さらに今一つ、これに類する用例として、広く世の肯定を手に入れたつある「ポジティブ思考」にも、吟味の目を向けてみよう。その場合に、ここでのポジティブ思考は、そもそも中身をどうイメージされたらよいのだろうか」

「それって、もしかや「プラス思考」のことなのでしょうか。それなら具体例に事は欠かずに、たとえば「コップ半分のビール」なども、そうした典型にちがいありません」

「うん」

「真夏の夕刻のビアガーデンで、満々と注がれて白い泡を湛えた大ジョッキを片手に、大のビール好きが舌をなめているとしましょう。待ち切れなくてジョッキに口をつけたところ、あまりの美味さにグイグイとあおり、われに戻ると、ジョッキの中身はすでに半分になっていた——よく目にされる光景なのですが、その際、当の本人はどう反応するでしょうか。「しまった、もう半分も無くなった。もっと大事に飲むべきであったのに・・・」というのが、偽らざる気持ちにちがいありません」

「それで」

「ビール好きなら等しく共有できるこの気持は、しかし、ジョッキの中身が真半分」という客観的事実を、それと意識しないで特定方向から眺めた結果、おのずと導き出された嘆きにほかなりません。半分という事実が、この場合、飲み干されて無くなった「空の部分」に目を向けて捉えられていたのですから」

「うん」

「間違つてはいないものの、これのみが、捉え方のすべてというわけではありません。半分という事実は、飲み干されずビールに満たされた「充

の部分」についても、等しく当てはまるのですから。そこで「虚」から「充」に目を転じるなら、溜め息と軽い後悔に満ちた先のセリフは、おそらく、「もうけた、まだ半分も残っている。まだまだ楽しめるぞ・・・」という、喜びと舌なめずりのセリフにそのまま置き換わることでしょう」

「なるほど」

「二つのセリフは、各々が事実裏書きされ、それぞれに真つ当といえるのですが、この場合、前者のケースは「マイナス思考」と命名され、後者のケースは「プラス思考」と命名されています」

「しかるべき具体例がただちに思い浮かぶのは、理解の及んでいる何よりの証左として文句なく褒めておきたいものの、ただ、「プラス」「マイナス」という命名ばかりは、世の通例とはいえず、いささか妥当性に欠けるのではないだろうか」

「といいますと」

「そのような「プラス」や「マイナス」には、暗々裡に価値的なイメージがまといついて、前者はあくまでも好ましく、後者はあくまでも好ましくない、といった暗黙の評価を引きずらないわけにはいかないからだ。二つの思考様式はしかし、一方がひたすら好ましく、他方はひたすら好ましくない、といった固定の価値づけに唯々諾々と従うわけではなく、この点に配慮すると、ここでの「プラス」と「マイナス」は、むしろ「ポジティブ」と「ネガティブ」に置き換えられなくてはならない」

「そうした場合には、双方の差も、単なるポジ（陽）とネガ（陰）の差となつて、置かれた実状にいつそう沿うだろう、というわけですね」

(一〇)

「ネガティブ思考とポジティブ思考の実際は、すでに紹介してもらった

ように、ビールジョッキの飲み干しに託して端的に浮き彫り化できるのだが、これに類した逸話は、少し昔に目をやっても、いくつか発見できるにちがいない」

「ええ」

「たとえば、寺院の説教僧が好んで披露する「婆さんと二人の息子」の物語も、そうした一つであるだろう」

「お聞かせください」

「すなわち——昔々ある処に、一人の老婆が、二人の息子と暮らしていた。息子たちはそれぞれ、一方(A)が履物屋を、他方(B)が傘屋を営んでいたが、ある雨の昼下がりに、くだんの老婆の家の前を、顔なじみの坊さんが通りかかったところ、どうしたわけか、老婆はシクシクと泣いていた。不審に思つて理由をたずねると、これだけ雨が降れば、息子Aの履物屋を訪れる客もなく、息子はきつと、恨めしそうに空を仰いで深い溜め息をついているだろうと考えると、悲しくて涙が止まらないとのことであつた。なるほどお気の毒に、という言葉を残して、坊さんは、老婆の家を後にしたのだが、その翌日、空は嘘のように晴れ渡つた。これなら、老婆のニコニコ顔を楽しめるだろうと考え、坊さんは、あえて老婆の家まで足を延ばしたところ、予想に反して、老婆はシクシクと泣いていた。合点が行かず訳をたずねると、これだけ晴れ渡れば、息子Bの傘屋を訪れる客もなく、息子はきつと、恨めしそうに空を仰いで深い溜め息をついているだろうと考えると、悲しくて涙が止まらないとのことであつた」

「……」

「なるほどお気の毒に、と一応は慰めの言葉をかけながら、坊さんはしかし、老婆にこう説教した。雨の日には息子Aの商売を思い浮かべ、晴れの日には息子Bの商売を思い浮かべて、かれらの落胆ぶりに涙するの

は、実の親として当然の情であるけれども、眺める相手を少しズラせてはどうだろうか。すなわち、雨の日には、浮かべる息子の顔を今のAからBに、晴れの日には、今のBからAに変えるのみで、目下の嘆き一色の世界は、ガラリと一変しないわけにはいかない。雨の日の息子Bは、商売の傘が売れに売れ、満面に笑みを浮かべるだろうし、晴れの日も息子Aも、商売の履物が売れに売れ、同じく満面に笑みを浮かべるだろうから、いずれにしても母親は、かれらの喜びを投影して、ニコニコ顔を押し殺すことはできないだろうから、とね」

「なるほど」

「天候を問わない泣き面か、それとも逆の喜色満面か——これを決定づけたのは、いずれの場合にいずれの息子に目を注いだか、の一点であつた。シビリアな現実を考えると、二人の息子が双方とも同時にひたすら笑い、老婆も、心置きなくニコニコできる僥倖はまず考えられないし、逆に、二人の息子が双方とも同時にひたすら嘆き、老婆も、心底からシクシクに浸る奈落もやはり希有であろうから……」

「その先はわたしに花を持たせてください。要するに、現実が具えるネガの局面にのみ目を固定しないで、必要に応じてポジの局面に目を転じるだけの、切り替えの自由をできるだけ確保しておく日頃の訓練が強く求められるのだ、と仰りたいわけですね」

(一一)

「ここに紹介した老婆のシクシク顔が「ネガティブ思考」を代表し、他方のニコニコ顔が「ポジティブ思考」を代表するのは、改めて断るまでもないが、それに加えて、そうしたシクシク顔とニコニコ顔が、単なるネガとポジの差に留まって、これを越えた価値の差にまで及ばない点も、

同じく言を待たないにちがいない。考えてももらいたい。老婆の喜色満面は、物事の好ましい面のみをもっぱらに眺めるポジの姿勢が招く必然の結果であり、その泣き面は、逆に、物事の好ましくない面のみをもっぱらに眺めるネガの姿勢が招く必然の結果であったのだが、そうしたポジの姿勢は、果たして、これのみで本当に十分といえるのかどうか、とね」

「答えるまでもありません。われわれの実人生が、さまざまの明と暗、表と裏、光と陰を巧みに配した一枚の綾錦に似た様相を呈している以上、あえて一方（明・表・光）のみを意図的に拾い上げるポジの姿勢は、方便ならともかく、ひたすら固執された場合には、人生の片面しか捉えない気楽な能天気を厳しく諒られないでは措かないでしょうから」

「そうした姿勢が積極的な意味をもつのは、ひとえに、他方におけるネガの姿勢の先天的な執拗さが強く意識されたことであつた。ポジにせよネガにせよ、いずれも事実の半面を正しく踏まえ、まっとうさの点で差のない以上、いかに考えても、単に片方のみで十分というはずはありえない」

「まさに同感です」

「以上、道徳では一般に、「飽くを知らない」よりは「足るを知る」を、「ネガティブ思考」よりは「ポジティブ思考」を、「征服」よりは「共生」を、という風に、一見したところ、後者のグループのみがことさら評価を受けているように映るけれども、少し掘り下げると、この片寄りはいかに、人間の宿業ともいべき生来の身勝手を念頭に置いて、これに根ざした特定方向への生理的片寄りを見据えつつ、その是正を図って、あえて逆方向への片寄りを人間的な課題として訴える形で、つまりは、双方の力動的なバランス（ないしハーモニー）が力説されているにすぎない、という点をしかるべく訴えてみたが・・・」

「道徳における表層メッセージは、直接の形で言表される各種の教えや戒めであるけれども、その深層メッセージは、直接に言表された教えや戒めとは逆方向の中身と、そうした前者の精妙なバランスなのだ、というわけですね」

「当たり前といえば当たり前なこの理解は、しかし——わたし自身の経験に照らしても——盲点さながら、そう広く行き渡っているともみなしがたい。有名な「コロンプスの卵」とまでは行かないだろうが、改めて、注意そのものを喚起するのも無駄ではあるまいと考え、ささやかな裏書きの汗をともに流させてもらった。ご満足いただけただけかな」

「お心使いに深く感謝いたします」

著者コメント

ここに紹介したダイアログは、実のところ、「道徳における表層メッセージと深層メッセージ」（『立命館文学・第六〇〇号』所収、二〇〇七年三月）というタイトルで、従来のモノローグの論文としてすでに公表されていた。それを、あえてスタイルを転換して改めて公表したのは、わたしなりの理由があつたからである。

教育哲学の分野で「プラトンの思想」を学んでいる手前、プラトン当人のアイデア論やプシケ論などの内容面に加えて、どうしても、対話篇」という固有の方法面にも目が向いて、なぜ当人は、広く世に訴えるべきメッセージを、モノローグでなく、あえてダイアログに託したのだらうか、と思いを巡らさないわけにはいかなかった。そしてこう考えた——この問いに、自分なりに得心のいく答えを見出すには、ともあれ自らが、現に扱っているテーマを、ダイアログに訴えて具体的に展開した上で、モノローグに訴えた場合と、どこがどう異なるのか等々に

ついて、わが身でしつかりと実感するほかはあるまい、と。

こうして、わたしなりの実践が、同じテーマをめぐって、モノローグとダイアローグの両面できり広げられ、そうした成果は、その都度、大略に紹介されていった。さらには、ダイアローグの部分のみを編集して、『ダイアローグによる日常性の教育学』（高岩出版、二〇〇九年一月）という単行本も出版された。

モノローグの論文については、これまでも書き慣れて、長所にせよ欠点にせよそれなりに熟知しているけれども、ダイアローグの方は、ささやかな体験があるとはいえ、いまだ十分に機能自体を知り尽くしたわけではない。たしかに、教育的なテーマを人間学的に扱おうとすれば、ロジカルな流れを基調とするモノローグでは、どうしても描き落ちざるを得ない事柄がその都度に浮上してきて、ために、テーマとスタイルの間で、世にいう「忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず」風の二律背反を味わうことも少なくはなかった。それが、スタイルを転じると、自動車利用の旅と飛行機利用のその差さながら、一方には突破困難なハードルも、他方には、必ずしもそうあるわけではなく、この点は、いささか気味悪い——とはいえ興味深い——発見の一つであった。

論文そのものが、従来のように、モノローグで綴られた論にひたすら等置されるなら、ダイアローグで綴られた作品など、とうてい「論文」

の名に値しないだろうが、そもそもその原点に立ち戻って、論文しかるべく裏付けられたメッセージと解するならばどうか。この場合には、当のメッセージを記すスタイルが、たとえモノローグであれダイアローグであれ、それほどの大問題とはならないはずである。むしろ、記されたメッセージに、しかるべき裏付けが施されているのか否か——これこそが、問われてしかるべき第一の点であったからである。

ともあれ、モノローグとダイアローグの——わたしなりの——対比的実践は、まさしく「緒に就いた」ばかりであって、今後も、さまざまな方向に展開されていかななくてはならない。たとえば、モノローグでは常に一人称（ないし非人称）で語らなくてはならないが、ダイアローグでは必然的に、二つ（ないしそれ以上）の人称が登場するから、これらを具体的にどう設定するかで、中身の展開も、かなりの自由度とダイナミズムを手に入れるのは否定できない。富者と貧者、男と女、勝者と敗者、老人と少年……いずれを想定するかで、テーマのリアリティもおのずと異なってくるはずである。このような点も、できることなら試してみたいな、とひそかに考えている。

どうやら、コメントそのものに「取り止め」が欠けてきたようだ。このあたりが、口をつむぐ潮時なのかもしれない。